巻頭対談

メコンの豊かな水の流れが多彩な人と文化を養ってきた

メコン流域には、古くから数多くの民族が暮らし、独自の文化を育んできた。メコンは人々の生活に何をもたらし、人々はメコンの何を利用してきたのか。歴史、文化から人々の交流、地域開発の問題まで、メコン流域の多様な世界へと誘う。

石井米雄（いしいよねお）
京都大学名誉教授

桑原 晨（くわはら しん）
めこん社長

ビエンチャン（右下）付近を流れる乾季のメコン河。右側はラオス、左側はタイ。河川敷は畑として利用されている
写真提供：ERPA=時事

ラオス・ビエンチャンのメコンは乾季と雨季で姿を変える

石井　「メコン流域」と言っても、メコンとの関係の深さは国によってかなり違います。各国を比べてみると、ラオスとカンボジアは国土の85％がメコン流域。ところが、タイは「イサーン」と呼ばれる東北地方に限られて国土全体の35％、ベトナムはメコンデルタだけで19％、ミャンマーに至っては東部のシャン州のケントゥン地域だけで3.5％です。国としてメコンと深い関係があるのはラオスとカンボジアだけとも言えます。そこで、国で考えるよりはメコンという河で考えることにして、話を始めましょうか。

僕のメコンとの関係は、1957年10月に「稲作民族文化総合調査団」の一員として、メコンを遡（さかのぼ）ったときに始まります。ちょうどその月に、国連の傘下にベトナム、カンボジア、ラオス、タイの4カ国が参加した「メコン委員会」（95年に国連を離れ、メコン河委員会となる）ができて、メコンに対する国際的な関心が高まっていました。

桑原さんは最初、青年海外協力隊で行かれたそうですね。メコンへの思い

いしい よねお●東京都生まれ。京都大学法学博士。在タイ日本国大使館、外務省アジア局勤務を経て、京都大学東南アジア研究センター教授、同所長などを歴任。現在、国立公文書館アジア歴史資料センター長などを務める。著書に『上座部仏教の政治社会学-国教の構造』『タイ近世史研究序説』『タイ仏教入門』など

くわはら しん●石川県生まれ。東京都立大学人文学部卒業。1970年より2年間、青年海外協力隊の日本語教師としてラオスのビエンチャンで働く。帰国後、出版社に勤務。78年、株式会社めこんを設立。現在まで約300点のアジア関係の書籍を出版

撮影：高木あつ子（どちらも）

入れは、ご自身の会社名を「めこん」としていることからもわかりますが、どうして、そこまでメコンに惚れたのでしょう（笑）。

桑原 1970年から2年間、ベトナム戦争が一番激しいころ、ラオスのビエンチャンにいました。メコンのほとりです。25～26歳でしたから、そのときの経験が大きいですね。出版社の名前を「めこん」にしたのは、会社を始めるときにアジア関係の本を出していこうと思っていたからです。

石井 ビエンチャンの人々にとって、メコンは切り離せませんね。

桑原 ええ、完全に生活の一部だと思います。

石井 メコンはちょうどビエンチャンで東に曲がり、その北側に砂がたまって巨大な畑地になりますね。

桑原 驚いたのは、乾季と雨季との水量の差でした。雨季にはメコンは轟々たる流れになります。何年かに一度は氾濫して、ビエンチャンに水が入ってくる。僕が行った2年目の71年にも氾濫しました。みんな総出で土嚢（どのう）を積みましたが、幸いそのときは町が水浸しになるほどではありませんでした。

ところが、そのあと、バンコクへ遊びに行こうと思って、タイ側のノーンカーイに渡ったら、町中水浸しで、汽車の駅まで水没していました。そこで、次の駅まで船で行ったんです。町が一つ水没するのですから、大変な水の量です。

ビエンチャンから対岸のシーチェンマイまで川幅は数キロありますが、これが氾濫するわけです。乾季になると、水が流れているのは1割ほどで、残りの砂地（川底）で地元の人たちは野菜をつくっていたり、サッカーをしたりしています。土手の上から下まで降りると高さ20メートルぐらいありますから、雨季の水量はいかにすごいかということですね。

石井 とにかく気まぐれというか、洪水になったり、カラカラになったりする。その意味でいうと、つきあい方がずいぶん難しい河ですね。

「5つの町」の国境を越えた通婚圏をメコンがつなぐ

石井 中国では「メコン」とは言わず、「瀾滄江（ランツァンジャン）」と呼ばれていますが、その手前まで、僕は船で上ったことがあります。このあたりでおもしろいのは、ミャンマーのシャン州のケントゥンです。ここには戦争中に日本の領事館が置かれ、日本兵がつくった道路があります。

シャン州は大きな州で、全体で言うとサルウィン川流域になるんですね。かつてここを研究したイギリス人はサルウィン川で地域を分け、ビルマ（ミャンマー）側から見て手前という意味で「CISサルウィン」、向こう側は「トランス・サルウィン」と呼びました。しかし、「サルウィン川の向こう」では、積極的には何も言っていないのと同じです。そのイギリス人は、実際にそこまで行かなかったのでしょう。

僕は、タイのチェンマイからチェンラーイへ行き、さらに北へ上がって、

ラオ人社会で最もポピュラーな楽器ケーン。ケーンづくりの名人が演奏を聴かせる。東北タイ（イサーン）中央部のコーンケン郊外にて

写真提供：柴永文夫（16ページ上、17ページも）

ミャンマー連邦
面積：68万km²／人口：5322万人（2004年、ミャンマー政府）／首都：ネーピードー／民族：ビルマ族約70%、多くの少数民族／言語：ミャンマー語／宗教：仏教90%、キリスト教、イスラムほか／主要産業：農業

タイ王国
面積：51.4万km²／人口：6304万人（2007年）／首都：バンコク／民族：大多数がタイ族。華人系、マレー系、多くの少数民族／言語：タイ語／宗教：仏教95%、イスラム教4%／主要産業：農業、製造業

ラオス人民民主共和国
面積：24万km²／人口：580万人（2006年世銀統計）／首都：ビエンチャン／民族：ラオ族、そのほか少数民族計49民族／言語：ラオス語／宗教：仏教／主要産業：農業、工業、林業、鉱業および水力発電

カンボジア王国
面積：18.1万km²／人口：1340万人（2008年政府統計）／首都：プノンペン／民族：カンボジア人（クメール人）90%、多くの少数民族／言語：カンボジア語／宗教：仏教、一部少数民族はイスラム教／主要産業：観光・サービス、農業、鉱工業

ベトナム社会主義共和国
面積：32.9万km²／人口：約8616万人（2008年）／首都：ハノイ／民族：キン族（越人）約86%、そのほか53の少数民族／言語：ベトナム語／宗教：仏教80%、カトリック、カオダイ教ほか／主要産業：農林水産業、鉱業、軽工業

シャン州へ入ってみました。するとまったく違った姿が見えてきました。サルウィン川の向こう側とは、実はメコンの流域なんです。「CISメコン」と言うべきだと思いました。

僕はそういうところへ行くと、いつもお寺参りをします。40軒ほどあるお寺を回って僧侶と話したところ、「ハー・チェン」という言葉を教えてくれた。タイ語、あるいはラオス語で、「5つの町」という意味です。

チェンマイ、チェンラーイ（どちらもタイ）、チェントウン（ミャンマーのケントウン）、チェンフン（中国の景洪（ジンホン））、チェントウン（シェントーン＝ラオスのルアンパバーン）、この5つの町が「ハー・チェン」で、通婚圏なんです（地図中の※印）。

桑原 カタカナで書くと、チェンとかシェンとかケンとか、違うもののように見えますが、全部同じ意味なのですね。

石井 つまり、ケントウンの人は同じシャン州でも、サルウィン川流域にはお嫁に行かない。むしろ国境を越えて、中国やラオスにお嫁に行く。そういうおもしろい話を聞いて、やはり行ってみなきゃわからないなと、つくづく思いました。

桑原 「ハー・チェン」をメコンがつないでいるわけですね。おもしろいですね。

コーンヌの滝。無数の岩塊によって行く手を阻まれたメコンの流れは複雑な分流をつくりながら、複合瀑布となって落下する
写真提供：桑原晨（14ページ、15ページ下、19ページ上も）

「天国との境界」を越えると静かな河は激流に変わる

石井 先ほどの話の通り、ビエンチャンあたりのメコンの流れは滔々たるものですが、下流までそのままというわけではありません。サヴァンナケートからビエンチャンまで、4日間かけて船で遡ったことがありますが、これがおもしろくない（笑）。理由は全然、景色が変わらないからです。右には山があって、左はコーラート高原。朝起きてもまた同じ風景で、船が動いていないのかと思うくらいでした。

ところが、サヴァンナケートは「天国との境界」という意味で、そこから下流は「地獄」なんです。なぜかというと、両側からごつごつとした岩が迫り、激流になり、非常に危険だからです。両側にも田んぼなどはほとんどありません。

その極端なのが「コーンヌの滝」という瀑布群です。19世紀中ごろ、フランス人は中国へ行こうと、サイゴン（今のホーチミン）からメコン河を何度も遡りましたが、ここまで来て、とてもじゃないとあきらめた。

桑原 カンボジアとタイの国境にはドンラック（ダンレク）山脈がありますね。標高500メートルほどで、それほど高い山があるわけではないのですが、カンボジア側が断崖になっていて、それがずっと東西に続いています。よく紛争のタネになるプリア・ヴィヘア（タイ名：カオ・プラヴィハーン）寺院もドンラック山脈の真ん中に位置しています。ドンラック山脈が東に延びて、それにメコンがぶつかると、コーンヌの滝になる。独特の地形です。

石井 メコンを一本の河だと思っていると、全然想像がつかないでしょう。フランス人がえらいのは、何とかして行きたいと長さ14キロほどの鉄道をつくったんです。涙ぐましい努力です。もっともその鉄道、今は誰にも使われていないのですが。

河の交通網が対岸の人を結び、支流から生産物を運ぶ

桑原 その一方で、メコンの交通を考えると、縦より横のほうが多いと思います。

石井 そうですね。メコンの中流域は南北をつなぐだけでなく、東西をつないでいます。人々は簡単に河を渡って、対岸に買い物に行くんです。僕もフランスのワインを買いに、河を渡って越境したことを覚えています。実話ですが、お妾（めかけ）さんを対岸に囲っている人がいました。お妾さんは、隣の国の物を買ってもらい、無税で届けてもらっているわけです（笑）。

桑原 現在、タイとラオスの間には、ビエンチャンの近くのノーンカーイ（タイ）とタードゥア（ラオス）に橋ができて、外国人はその橋を渡らないと出入国できません。あと、今ではムックダハーン（タイ）とサヴァンナケート（ラオス）にも橋ができています。

一方、今は船で渡れるのは、北のチェンコーン（タイ）とファイサーイ（ラオス）、東北のナコーンパノム（タイ）とターケーク（ラオス）など、2カ所ほどに減りました。国境を船で渡るのは夢があるというか、何となく楽しいですね。

石井 橋はおもしろくないですよ。ビエンチャンに橋ができたときに、ラオスの人が真っ先に言ったのは、「これで、どろぼうが増える」って（笑）。

桑原 メコン河の本流も大事ですけど、支流も大事ですね。ラオスでは、北のル

ムックダハーンの船着き場。船にはさまざまな荷物のほか、自転車やオートバイなども積み込まれ、生活の足になっている

アンパバーンから南のカンボジア国境まで、メコンのそばを国道13号線が走っていて、バスも利用できるようになりました。バスであちこち行けるようになったのはごく最近で、それまでは交通のメインは船ですね。それは全部、メコンの支流を走っています。

ラオスでメコンに流れ込む支流の源流はルアン山脈（アンナン山脈）で、その分水嶺がベトナムとの国境になっています。そういう川が無数にあって、人々の交通路となり、畑や田んぼを潤していますね。

石井 河口には、パークセーやパークサンなど、「パーク」がつく町が多いのですが、これは「河口」という意味で、パークセーはセー・ドーン（ドーン川。セーも川の意味）の河口、パークサンはサン川の河口のことですね。

ラオスだけでなく、前近代における東南アジアの輸出品は森林生産物でした。森林は主に支流沿いにあり、とれた木材や動物、鉱物などを輸出するため、支流の河口に町が栄えました。

桑原 最近、ラオス北部では中国の援助によって道路が建設されて、河の交通がだんだん減ってきていますが、それでも田舎に行くと船でしか移動できないところが多い。昔を考えると、支流の果たした役割は、もっと大きかったでしょうね。

石井 ラオス北部のルアンナムターは支流のナムター川の河口にできた町で、栄えていました。そこには、雲南から品物を持ってキャラバンが下りてくる。つくづく近代国家というのは不自由だなと思います。彼らに「中国から来るのに、パスポートは?」と聞くと、「パスポートって、なあに?」と言うんです（笑）。

彼らにしてみたら、しょっちゅう行き来しているわけで、国境なんて意識はなく、単にメコン流域でしかない。タイとラオスの国境をメコンにしたのも、フランスが決めたことで、行き来しなければ、生活できない。その意味で、現在の国民国家の地図で見ると、見えてこないことがたくさんある。地図は二次元ではなく、三次元で見る必要がある。「支流が大事だ」ということも、二次元じゃわからないのです。

桑原 東北タイとラオスでは、ラオ人がメコンをはさんで両側に住んでいますが、これもあとから国境ができただけで、もともと同じ民族ですし、何かあった場合、ラオスにいた人が親戚を頼ってタイ側に来ることもしょっちゅうある。

東北タイのナコーンパノムの南にタートパノムという大きな仏塔があります。ラオ人にとって大事な仏塔で、祭りがあるときには、メコンを渡ってラオスから人が来るんです。国境なんかもともと関係ないわけですから。

石井 日メコン交流年という形で、メコンという切り口をつくったのは非常によかったと思います。ただ、メコンを流域の5つの国にしないで、河がつくり上げている文化として捉えるには、一度国境を取っ払って考えてみるべきだと思います。

モン・クメール系の人たちにラオ人やタイ人は文字を教わった

桑原 では、そのラオ人がラオスで大多数かというと、実際には全体の5割ぐらいですか。特に南のほうでは、モン・クメール系の人たちの文化の影響力が強いですね。

石井 そうですね。ラオスは憲法上、国民を山頂（ラオ・スーン）、山腹（ラオ・トゥン）、平地（ラオ・ルム）の3つの民族群に分けています（この区別は、最近は公的には使われなくなったという）。簡単に言うと、主に平地にいるのがラオ人で、山頂にいるのはモン（Hmong）、すなわち中国の苗族（ミャオ）。山腹は主にモン・クメール系ですが、こちらのモンはMonです。

モン人の刺繍のタペストリー。タイのバンビナイ難民キャンプ（1985〜91年まで設営）にいたモンの女性の手によるもの。麻の栽培や収穫、機織り、藍染めなどの布づくりのプロセスとともに、ラオスの山での生活が描かれている

写真提供：安井清子

山頂近くへ僕らが行くと、山の上に犬がいて、ワンワンと吠える。すると、向こうの山でも、別の犬が吠えるんです。山頂の民の日常世界は山頂同士でつながっていて、下はあまり関係ない。下におりるのは、鉄砲で仕留めた獲物を担いで売るときで、お米などと交換して生活するわけです。全然、住んでいる世界が違うのですね。

桑原 南部の山腹にいるモン・クメール系の人たちは、ラオ人とは異なる確固とした文化を持ち続けてきました。ベトナム戦争のときも、それ以前も、彼らの果たした役割は非常に大きい。

石井 むしろラオ人やタイ人は、あとから来た人たちで、その前にはモン・クメール系がいたわけです。

おもしろいのは、タイ側からメコンに直角に流れ込むムン川がその文化の分水嶺になっていることです。その北はラオ人だから全部もち米で、南はうるち米と、はっきりと分かれています。かつてはモン・クメール系の人たちがいたのだから、おそらく全部うるち米でしたが、ラオ人が入ってきて、北側はもち米地帯になった。

モン・クメール系の人たちは6〜11世紀ごろに、ドヴァーラヴァティという国をつくりました。このドヴァーラヴァティという言葉は、タイの正式な国名の中にも入っている伝統のある国なんです。

ビエンチャンにもモンのつくった碑文があるくらいで、今のビルマ文字はモン文字を改変したものです。つまり、ビルマ人はモン人から字を習ったわけです。同様に、タイ文字はクメール文字から来ています。今ではタイ人やラオ人は、モン・クメール系の人を野蛮のように言いますが、本当は彼らの祖先から習って文化をつくったんですね。

タイは総人口の約3分の1が東北部にいて、この地域を「イサーン」と呼びます。タイの人たちはイサーンは田舎だと下に見がちですが、かつては文化の中心でした。最大の理由は、ここに塩と鉄があったからです。塩と鉄は古代文明のコアですね。

プリア・ヴィヘア寺院に立つ桑原氏。クメール人によってつくられたヒンドゥー寺院で世界遺産に登録されている。ドンラック山脈の断崖の上に建ち、地形的にはタイ領だが、ここだけはカンボジア領。所属をめぐって、ときにタイ軍とカンボジア軍の衝突が起きる。カンボジア内戦のときは、クメール・ルージュの軍地だった

シーチェンマイのメコン河のほとりでライスペーパーづくりを行なうベトナム人。米の粉を原料に水を加え薄く伸ばして蒸し、できたものを丸みを帯びた竹製の板に貼りつけて干す

今、栄えているところが、昔から栄えていたかどうかはわからない。今では少数民族になっている人たちのほうが、高い文化を持っていたということもあると思います。そういう人たちは、みんなメコンと絡んでいます。

東南アジアではメコンを通ってダイナミックに人が移動する

桑原 僕はラオスにいて、一番印象に残っているのはメコンを中心とした人の移動なんです。インドシナの場合、国籍はほとんど意味をなさない。例えば、クメール人がラオスにいたり、ラオ人がタイにいたりするのはあたりまえで、移動の距離も長い。このあたりは、日本人としてはイメージしにくいところですね。

有名な話ですが、1928年から2年間、フランス軍の追及を逃れたホー・チ・ミンがメコン沿いのナコーンパノムの近くに住んでいて、現在では「ここにホーおじさんがいました」と観光名所になっています。その周辺はベトナム人が多くて、現在でも、ライスペーパー(春巻きの皮)をつくっています。

サヴァンナケートには、フランス植民地時代のしゃれた家をホテルにした、その名も「メコンホテル」があります。泊まってみたら、ベトナム人の経営でした。ホテル前の美容院で働いているちょっと怪しい女の子たちはみんな、近くを走る国道9号線を通ってダナンから来たベトナム人だということでした。

あちこちで、カンボジアから来た女子店員とか、フエから来たベトナム人とかに出会います。タイ南部のリゾート地のプーケットでラオ人の運転手に会ったことがあります。そういうネットワークがあるのです。彼らは商売にならないと思ったら、パッとどこかへ行ってしまう。みんなメコンを渡って来るんです。そういうダイナミックな人の移動が、興味深いと思いました。

石井 確かに東南アジアの、特に内陸部は人の移動が大きいですね。マレー半島のスズ鉱山で働いているのは、ほとんどが東北タイのラオ人です。農閑期に来て、農繁期になる直前に帰る。遠いところからでも平気で移動している。

アンコールの都市文明はトンレサップがつくった

石井 さらにメコンを下って、カンボジアですが、忘れてはならないのは、アンコール・ワットとメコンの関係ですね。アンコール・ワットの近くにはトンレサップという大きな湖がありますが、この湖はメコンと深い関係を持っています。

トンレサップ湖は巨大な遊水地です。というのは、メコンは雨季になると逆流して、洪水が起こり、その水がトンレサップに流れ込みます。雨季は湖の面積が3倍ぐらいに広がります。

トンレサップにはたくさん魚がいるし、周りには水田もある。アンコールという一種の都市文明ができたのは、トンレサップのおかげとも言えます。トンレサップがなかったら、メコンのあちこちで洪水が起きたでしょうし、メコンが逆流しなかったら、アンコール・ワットはすぐに滅びていたと思います。

桑原 水量が減ると、人間の生活が根本的に変わるでしょうね。

石井 一方、カンボジアの仏教は、ポル・ポト政権下で一度、滅びてしまいました。仏教は僧侶がいなくなったら、もうおしまいなんです。ちゃんと戒を守っている僧侶がある一定数そろわないと存続しないし、復活もできません。

ところが幸いなことに、ベトナムのメコンデルタにクメール人がいるんです。もともとメコンデルタには、ベトナム人が18世紀に入ってくるまで、クメール人が多く住んでいて、現在でも、

アンコール・トムにあるバイヨン。数多くの塔に人面像が彫られている。他のアンコール遺跡群とともにクメール文化を代表する建築

いわゆるカンボジア系ベトナム人がいるわけです。

彼らは、ベトナムの大乗仏教ではなく、カンボジアの上座仏教を信仰しています。彼らが今、カンボジアへ行って、仏教を復興しました。まさにメコンをたどり、プノンペンを経てアンコールで、ポル・ポトがつぶした仏教が再興しているわけです。

桑原 メコンデルタは、ベトナムのなかでも特殊なところですね。

石井 メコンデルタは他のメコン流域と区別して考えたほうがいい。メコンデルタと、遊水地としてのトンレサップ、それからメコン中流域に分けると、メコンが立体的にわかってくると思います。

メコンデルタは輸出米の生産地で、米をつくる以外ありませんでした。東南アジアではメコン、メナム、イラワジの3カ所のデルタ地帯が米の生産地ですが、メコンはそのなかでもトップクラスです。

飛行機に乗って河口から見ていくと、土地ができていくのがよくわかります。陸か海かわからない浅瀬から、地面にポツポツと家が建ち始める。「なるほど。こうやって国ができていくのかな」と思ってね。

トンレサップ湖で獲れた魚で、魚醤をつくる。魚醤はメコンの国々の大切な調味料。カンボジアではトゥック・トレイと呼ばれる

桑原 上から流れてくる泥や土が堆積するから、肥沃な土地になるわけですね。

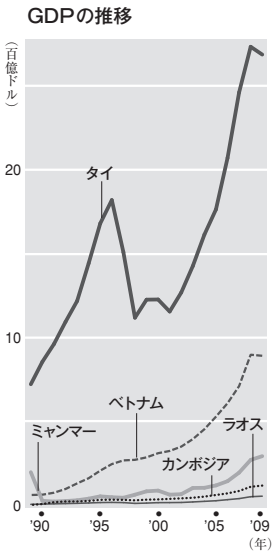
古都ルアンパバーンは良くも悪くもバリのような観光地になった

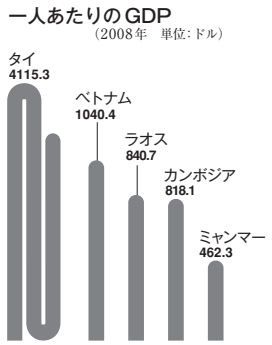
石井 日メコン交流年ができた背景には、メコンの地域開発の問題があります。そういう意味では、歴史的に考える必要があります。メコン委員会ができたのが1957年、ベトナム戦争が75年に終わると、今度はカンボジアとベトナムの関係が険悪になって、「メコンを共同で考えよう」という政治的雰囲気がなくなりました。ところが、90年代になって「もう一度考えよう」という気運が高まり、地域開発協力が進み始めたわけです。

しかし、ラオスの中流域は何もないのが際立ちます。開発援助するにしても、何を援助するのかという感じはしますね。

桑原 観光では、古都のルアンパバーンかコーンヌの滝、ワット・プー、首都のビエンチャンぐらいで、ラオスには目玉になるところはほとんどありません。それ以外は山ばかり。

交通網も観光施設もまだ整っていません。例えば、僕がこの前に行った北部のムアンゴーイ（ルアンパバーン県）は、わりと有名な観光地ですが、船で





メコン流域の5カ国のなかで、経済規模はタイが群を抜く（左）。1990年代後半のアジア通貨危機を乗り越え、近年、急成長を続けていた（09年は予想値）。一人あたりのGDPを見ると（右）、社会構造が変わり、中産階級の拡大や民主化が進むとされる3000ドルを突破しているのはタイのみ。ベトナムは自動車の普及が始まるとされる1000ドルを超えた。ミャンマーは1日1ドルの貧困ラインを超えたばかり

IMFの統計より作成

しか行けません。小さな集落にはバンガローしかなく、電気は午後6時ぐらいでストップするし、お湯が出ず、貯めた水で体を洗うしかない。たしかに手つかずの自然が残るきれいなところですが、そういうところで、日本人観光客がエンジョイできるかどうか。

石井　日本の観光客は甘えていますからね。「水をかけるのも悪くないんじゃないの」という桑原さんみたいな変わった人が多ければ別ですけれど、「トイレはどこでもいいですよ」と言われたら、どうするかということですね（笑）。

桑原　そういう意味では、まだ観光客を受け入れるキャパシティーはないと思います。しかし、その一方で3年前に30年ぶりぐらいにルアンパバーンに行ったら、変わりように驚きました。「ルアンパバーンのバリ化」だと思うんです。良くも悪くもバリのような観光地になってしまいました。

石井　これから最も開発が遅れているラオスへ、いろいろなものが猛烈なスピードで入っていくということでしょう。

57年に僕が行ったときは、道路に信号機がないのがあたりまえでした。ところが、しばらくすると信号機がついたんです。まだ自動車はないのに。子どもが「赤になった、青になった」と喜んでいるだけでした。

メコン流域を見ていると、こうした現実と開発のずれがよくわかる。その意味で、少しでも昔のままにしてほしい。バリ化はまずいですね。

メコンに地域開発の波が押し寄せ始めている

桑原　そう思います。南のほうに標高1000メートル近くのボーラヴェーン高原がありますね。気候に恵まれていて、雨量も多く、木がよく茂っていて、昔はトラもすんでいたそうです。フランス人はそこに別荘をつくり、コーヒーの栽培を始めた。

1998年にここへ行ったときに、ダムの建設現場に連れて行ってもらったのです。そうしたら、はるかかなたまで木の切り株だらけ。ため息が出るような無残な光景でした。ボーラヴェーン高原は、本来スポンジのように水を貯め込んでいるのですが、あのように片端から木を切ってしまうと、いったいどうなるのか。ぞっとしました。

また、ターケークからベトナム国境に行く国道8号線では、直径が2メートルぐらいの原木を積んだトラックが地響きを立てて、次から次へ走っていました。これはベトナム国境に接した、野生動物の宝庫と言われるナーカーイ高原から切り出したものです。

石井　森林破壊をしているわけね。

桑原　ええ。この二つの光景を合わせて考えると、いくらラオスは森林資源が豊かだと言っても、将来どうなるのか恐ろしい。悪しき例がタイですね。昔は豊かな森林があったのに、チーク材の輸出で、今では少なくなりました。それを

人口120万人を擁し、活気を見せるプノンペンの街角。カンボジアは社会の安定化にともない、2004年から3年にわたり、10%を超える成長率を記録している　写真提供：亀田正人（19ページ下も）

ラオスのターケークからベトナム国境へつながる国道８号線を、伐採した直径２メートルほどの原木を積んだトラックが行き交う

中国が瀾滄江（メコン上流）に建設した漫湾ダム。中国は瀾滄江に14のダムをつくる計画を立てている

ラオスの人は知っているから、同じことは繰り返さないと思うのですが。

石井 これもメコンの支流のおかげですが、ラオスは水力発電に力を入れていて、電気がタイへの大きな輸出品になっています。また、鉱山資源も豊富にあるので、50年、１００年後を考えると、ものすごい資源開発が起こりうる。そうすると、よきラオスはなくなるかもしれない。

桑原 すでにオーストラリアの会社が、国道9号線の第二次インドシナ戦争のときの激戦地セーポーンに、大きな金と銅の採掘工場をつくりました。ベトナム国境に近い山の中で、本当に辺鄙なところです。そこに突然３０００人の従業員を雇うほどの大きな工場ができた。現在では、この工場は売却されて中国の会社の資産になっています。ラオスの鉱物資源はほとんど未開発ですが、大きな可能性を秘めていると言われています。

石井 今後20年ぐらいで、ものすごく変わる可能性があります。今、中国は瀾滄江に14ものダムをつくろうとしています。完成したのはまだ1カ所だけですが、それだけでも下流の状況が変わります。

メコンの開発を考えるとき、本当は中国が入っていないと議論できません。「ダムをつくるのは中国の自由かもしれない。しかし、水は流れていくんだから、その流れを勝手に変えないでほしい」と言うべきです。その意味で、日本が仲介者の役割をできるといいなと思います。

今度行こうと思っていますが、ラオスのファイサーイから中国の景洪まで、かつて岩があって船が通れなかったところを、今は観光船が通っている。それは中国が岩を爆破したから。じゃまなものがあったら、爆破すればよいという発想です。

中国はそれによって、南へ抜ける道を確保できた。チェンセーンは昔はすごく寂れた町でしたが、今では大きなホテルが建っています。中国から客が来るからです。チェンセーンから、陸路チェンラーイを経由して、バンコクへ抜けられるわけで、中国にしてみると、経済的な利益があったわけです。

桑原 ラオスを歩いていると、東側のルアン山脈の分水嶺からメコンに流れてくる血管みたいな支流がいっぱいあって、本当に自然に恵まれている国だなと感じます。その水は上流に森林があるから溜まるのです。木を切ってしまうと、水量が減り、大変だと思います。

それに加えて、中国にダムができたらどうなるのか。メコンでは魚が獲れなくなるかもしれない。トンレサップへ逆流する水が少なくなり、メコンデルタの肥沃さも失われるかもしれません。

石井 このごろ僕は開発という言葉が怖くなってきました。開発の問題をあまり楽観的に考えることはできません。「持続可能な開発」と言っても、それが果たしてできるのか。日メコン交流年も、そもそも「開発とは何か」という文脈も含めて、改めて考えないといけないと思います。

（２００９年5月19日、アジア歴史資料センターにて）